

国語 その一（六枚のうち）

一

次の文章は『五感の哲学』という本の一部です。これを読んであとの質問に答えなさい。

俗に「鼻が利く」という言い方がありません。それは、嗅覚が敏感で、わずかな徴候から何か重要なことや利益になることを嗅ぎ当てる能力に長けている性質を示します。それも、他の人よりも素早く、そして密かに気配を察知して行動することができると、そんな様子を「鼻が利く」と表現します。

また嗅覚の特徴のひとつに、一時的には、そのセンサーがなくてもそれほど不便ではないという点があります。実際、私たちは風邪をひいてまったく匂いが感じられなくなっても、呼吸さえできていれば、直ちに生活に困るということは普通はありません。映画のように匂いの感じられない疑似体験であっても、私たちは充分に感動したり泣いたりすることができず、そこに匂いが欠落しているということに気づきもしないほどです。

しかし逆に、やはり息をしなければ生きていられませんか、漂う匂いをまったく嗅がずに長く留まり続けることはできません。強い悪臭ならば、すぐに避けて、遠く距離を置かねば命にかかわるのです。このように、一時的にはなくてもさほど困らないけれども、しかし完全に遮断し続けることは難しいという特徴をもつ嗅覚は、私たちに何を与えてくれているのでしょうか。

嗅覚から得られる体験は、それが化学的な反応だとは分かっていますが、視覚や聴覚のようにには明解にデータ化することができず、そこに何か割り切れないものが匂うのです。

こんなふうにはぼんやりした印象から、本章の考察を始めてみましょう。なにせ、私たちの嗅覚は犬よりも猫よりもはるかに鈍く、そして次節で見えるように、おそらくは父母や祖父母の時代よりもさらに鈍ってしまっているらしいのですから。

かつて日本には、「田舎の香水」という言葉がありました。農村地帯に入って堆肥や肥やし臭いがプーンと漂ってくる、つい、その言葉を呟いてしまったものですが、そんな言葉はもう最近はずっと使われなくなりました。

昔は田舎に限らず、どこでも今よりも何かと臭かったように思います。映画館は換気が悪くて、お煎餅とキャラメルの香りや*ご不浄の臭いが強く立ちこめて、映画を見終わる頃には頭痛がしたものでした。あるいは冬のスキー場のトイレも、蒸れた尿の悪臭で息もできないほど臭かった記憶があります。「田舎の香水」という言葉が消えたのは、それが田舎への差別表現だからという理由だけではなさそうです。

現代の日常生活では、田舎でも都会でも、もはや強い生活臭など嗅ぐことはほとんどありません。生活水準が向上してゆく中で、臭いことは撲滅すべき悪となり、無臭と芳香とが求められてきたのです。生きていく限りは必然的に発生するはずの体臭も敵視されてきました。そして本来の臭い匂いは「元から断たなきゃダメ」なものであり、合成された芳しい香りや防ぎ、誤魔化すことが一般化しました。とにかく嫌な臭いを封じる、ということに私たちは*邁進し、無臭と芳香にすっかり慣れてきてしまった

*ご不浄……………トイレ。

*邁進……………まっしぐらに突き進むこと。

国語 その二（六枚のうち）

のです。

トイレの無臭化について、すでに昭和初期に谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）が「廁のいろいろ」（『陰影礼讃』一九三三）という文章を書いています。

「便所の匂には一種なつかしい甘い思い出が伴うものである。たとえば久しく故郷を離れていた者が何年ぶりかで我が家へ帰って来た場合、何よりも便所へ這入って昔嗅ぎ慣れた匂を嗅ぐときに、幼児の記憶が*こもこもよみがえって来て、ほんとうに『我が家へ戻って来たなあ』と云う親しみが湧く」

このように谷崎は、便所の臭いにも風流を感じています。そして既に、そんな匂いが失われつつあることに気づいていました。

谷崎は、ある友人が名古屋のお屋敷から、ふと漂って来た便所の匂いが誠に雅びであったと感心した話を聞いて、便所の匂いの効用を説くのです。しかし同時に、そういう経験も次第に減ってきてしまうだろうと嘆きます。「他にもいろいろの原因があるに違いないが、水洗式だと、清潔一方になってしまつて」（前掲書）つまらないというのです。

かつて風雅な人は微細な匂いの差異に気づき、そこから多彩な文化の風合いを感じ取っていました。ところが、清潔だけを目指して画一化してしまうことを、既に昭和初期の谷崎は惜しみ憂っていたのです。今の子どもたちは、初めて本物の花の香りを嗅いだときに、トイレの芳香剤の匂いがあると言うそうです。実は私も、薔薇の香りは合成のほうを先に知りました。幼い頃に、薔薇の香りの消しゴムをスースーと嗅いで、良い匂いだと感じていたのだと思います。そして、今までに本物の薔薇の香りに包まれた経験など一度もないのに、日常では化学的に合成された薔薇の香りを楽しんでいきます。もしかしたら私も、本物の薔薇の香りを嗅いでも、日頃の答え合わせができたと思えないのかもしれないかもしれません。ああ、やはりこういう匂いだったのか、ローズの香りの入浴剤は正解だったのだな、と。

人様のお宅を訪問すると、その家の独特の匂いに誰しも気づくものですが、数年前からスプレー式の消臭剤が普及して、お客さまが見える前にはシュツシュツとスプレーして、室内の空気やカーテンの臭いを消すことが習慣化しているようです。なにも匂わないのが良いおもてなしであり、エチケットであるということになっています。家族だけの空間でも、夕飯の匂いが次の朝に残らないように夜のうちに、カーテンやソファにスプレーしておくの良いようです。現代では、強い生活臭を根絶することが、素敵な生活を意味しているのです。

近代化の過程で、このように人々が人工の香りを駆使したり、無臭化したりして自然な匂いや生活臭を消そうとしてきたのは、なぜなのでしょう。なぜ、生き物本来の匂いを遠ざけようとしてきたのか、ここ数百年の間に、人々は何の香りを嫌い、何を嗅ぎたいと願ってきたのでしょうか。

二十世紀は視覚中心の時代であり、メディアの発展を*牽引してきたのは映像技術です。並んで聴覚においてもまた音響技術が発達して、いまや映像と音声はかなり高い水準で、電気さえあれば、いつでもどこでも手軽に楽しめるメディアとなっています。

しかし、嗅覚となると、かなり以前からテレビの料理番組で「香りをお伝えできないのが残念です」

*こもこも……多くのものが入り混じって。

*牽引……ひっぱること。

国語 その三（六枚のうち）

といいながら、まだいっこうに匂いは電波に乗りません。言葉やイメージという、間接的なメディアで比喩的に伝えることしかできないのです。あるいはメディアとしてだけでなく日常生活においても、レンズや音声増幅の技術によって視覚障害と聴覚障害をカバーする技術は大いに発達し、眼鏡やコンタクトレンズ、補聴器などは私たちの快適で安全な生活を補助してくれているのに比べて、嗅覚を補助するメカはいまだに一般化していません。嗅覚に障害があっても、医学的に対応するしか手立てはない。つまり嗅覚は、機械技術にはまったく適合しにくい感覚なのです。

味覚センサーの開発者である都甲潔は、嗅覚でも客観的なデータが可能かどうかを検討しています。味覚センサーが「食譜」として機能したように、はたして嗅覚でも「香譜」ができるのでしょうか。この問題に対して、都甲は悲観的な見解を示しています。味覚と嗅覚は、かなり重なり合っている似たような感覚なのに、なぜ「香譜」は難しいのでしょうか。そこに嗅覚独自の謎が秘められているかもしれませんから、都甲の説明を少し追ってみましょう。

香りの化学的な成分は既にかなり詳細に分析されていて、実際に、薔薇の花をまったく使わない薔薇の香料は製品化され、ごく手軽に使われています。おかげで現代の生活には、人工の疑似臭が氾濫しました。こうして化学的には簡単に合成できるのに、楽譜のように体系化できないのは、香りには基本臭がないからである、と都甲は説明しています。味ならば、甘い、塩っぱい、辛い、酸っぱい、苦い、それに加えた六つの要素に分け、それらを数値化して譜面を作ることができました。

しかし香りは「甘い」というようなA的な軸を立てられないのです。確かに「甘い」香りという表現はあります。しかしそれは、バニラの香りなのか、沈丁花の香りなのか、母乳の香りなのかによって、ずいぶんと違った「甘い」香りです。味覚ではある程度は要素としてまとめることができるのに、香りではできないのです。「甘い」香りに感じられるというデータでグループ分けをしようとしても、ゆるい括りになってしまつて、それらの強度を数値化することができない。匂いは、感じられる要素だけで抽出するのが難しく、薔薇なら薔薇の香りとしてしか分類できないのです。

どこまでもB的で具体的なものに即して、C的にはなり得ない点を、都甲は「匂いの言葉が対象物の名前を使って表現されること」と関連づけています。「甘い」香りというときの、「甘い」は単に味覚からの比喩表現であつて、実際には、D的にバニラや沈丁花や乳の香りがするのであつて、それらをまとめて一言で表現しても意味がないのです。

これは、味との比較でいえば、料理では塩や砂糖のような調味料があります。海水からできた塩と岩から掘られた塩は、厳密には違うのですが、それぞれ精製して塩という要素ができています。その調味料を配分して美味しさを構成するのですが、香りにはそのような調香料というものができにくい。いくら精製しても、それはやはりどこまでも薔薇の香りであり、麝香鹿の香りであり続けるのです。

この普遍化になじまない性質、抽象化できにくい在り方のせいで、嗅覚は数値化してデータにすることが困難であり、そのことが、いつまでたつても香りが電波に乗らない理由でしょう。言葉に変換して伝えるしかないわけです。香りが具体的な物から離れて抽象化できにくい情報であることは、*バーチャル世界へと突き進む近代社会とは相いれない、いわば人間の原初性を保つ砦としての意味を、嗅覚が担っている証かもしれません。

*バーチャル……擬似的な。仮想の。

国語 その四（六枚のうち）

香りが電波に乗らないということは、ただ単に料理番組で美味しそうな香りが伝わらないといった不満だけでなく、より深刻な影響を私たちに与えているのです。

匂いが電波に乗らないことは、架空の、現実にはあり得ない光景を私たちに体験させることとなります。もしそれがリアルな現場であれば、当然、そこに強く匂っているはずの香りが、テレビの画面からは伝わってこないのです。

たとえば、激しい戦闘シーンで死体が累々と横たわっている場面では、いかに映像としてはリアルであっても、画像で見ているだけの私たちにとってはまったく無臭です。本来ならば息ができないほどの血の匂い、武器が炸裂した火薬の残臭、死体が腐敗してゆく臭気を、何も感じないまま見続けることはできないはずです。ところがそれができてしまうのは、画面から匂いがまったく流れ出てこないからです。

そのようにして状況を冷静に観察できることは、理性にとって有利ではありません。そのおかげで細部を見つめて分析することができるでしょう。しかし、そこには匂いが欠けている。映像で戦場を見ることが本物の体験とまったく異なるのは、嗅覚が封じられている点が大きいのではないのでしょうか。匂いがあるかどうかで、臨場感がまったく違うのに。

客観的に見る、というスタンスが理性的な思考にとって重要であることはいまでもありません。しかし、嗅覚を取り除いて考えられるということは、生き物のリアルな本質を問う場面では、大事な要素を欠くこととなります。だから、抽象的に思考をしながらも、同時にそこに匂いを想像で補う必要があります。もしその場にいたら、どんなに臭いことだろう、という想像力を働かせなければならぬのです。

しかし、無臭化が進んでいる生活に慣れていると、体験したことの無い匂いを、その場に補うことは難しい。ないことに気づくには、かなりの注意力が必要です。それに気づくためには、ふと考えてみる、記憶を辿ってみる、そして想像してみるために立ち止まる必要があるのです。

おそらく私たちは身の回りから悪臭を遠ざけると同時に、匂いに対する感受性や想像力をも弱体化させてしまったのでしょう。そしてそのことに気づきもしないことが、いま最も大きな問題なのかもしれません。テレビ画面に広がる悲惨な光景を、お茶の間で平気で見ていられるのは、現場の匂いを体験しなくて済むからです。匂いの有無こそが、リアルな体験とバーチャルの違いです。画面も音も限りなく現実に近い体験ができていても、匂いは電波にも無線LANにも乗ってきていないことには気づきにくい。具体的な物は、必ず匂いを発散しています。生き物は強い香りを放っているのです。

無臭化と芳香化に邁進する時代において、嗅覚スイッチを切ったままの映像で疑似体験ばかりを積んでいることは、生命体として何か致命的な状況に向かっているような不安を感じないではいられません。

（加藤博子の文章による。なお、本文には一部省略したところがある）

21	受験番号
中	

国語 その五（六枚のうち）

問一 「そんな言葉はもう最近はずっと使われなくなりました」とあるが、それはなぜですか。

問二 「水洗式だと、清潔一方になってしまつて…つまらない」とあるが、そう考えるのはなぜですか。
谷崎^{たにざき}があげる具体例をふまえて説明しなさい。

問三 「もしかしたら私も、本物の薔薇^{ばら}の香り^{かお}を嗅^かいでも、日頃^{ひごと}の答え合わせができたと思えないのかもかもしれません」とあるが、それはなぜですか。

問四 「つまり嗅覚^{かじうかく}は、機械技術にはまったく適合^{ごうあ}しにくい感覚なのです」とあるが、なぜそのように言えるのですか。このあとに続く味覚^{あじかく}と比較^{ひかく}して説明しなさい。

国語 その六（六枚のうち）

問五 本文中の A D の空欄に入る語の組み合わせとして正しいものを一つ選んで、ア～オの記号で答えなさい。

オ	エ	ウ	イ	ア
A	A	A	A	A
包括	個別	具体	抽象	具体
B	B	B	B	B
個別	包括	包括	個別	抽象
C	C	C	C	C
具体	具体	個別	包括	包括
D	D	D	D	D
抽象	包括	抽象	具体	個別

問六 「嗅覚スイッチを切ったままの映像で疑似体験ばかりを積んでいることは、生命体として何か致命的な状況に向かっている」とあるが、筆者がそのように考えるのはなぜですか。

二

次の各文のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- ① 情報のシユシヤ選択が大切だ。
- ② 病人をカンゴする。
- ③ 親友の頼みはムゲに断れない。
- ④ ガイロジユの手入れをする。
- ⑤ 辞書を編む。
- ⑥ 身をゴにして働く。

	① シユシヤ選択		② カンゴ		③ ムゲに
	④ ガイロジユ		⑤ 編む		⑥ ゴにして
選択		む		にして	に